小報もがみ

第7号

いずみちゃんのお菓子

いずみちゃんと出会ったのは今年の始め頃、子育て支援センターひまわりで娘を遊ばせていた時だった。ニコニコ笑顔のいずみちゃんが、他のお母さんとなかなか交流できず隅っこでもじもじしていた私に話しかけてくれた（人違いだったが）。勘違いから始まった出会いだったが、今思えば、私にとって必然的な出会いだった。

その後度々顔を合わせては、いずみちゃんと、子育てのこと、仕事のことを話すうちに仲良くなり、同じくらいの世代の友人がいなかった私にとって頼れるお姉ちゃん的存在になった。

いずみちゃんが若宮の自宅に構えるお菓子工房ainsi（アンシー）は、店舗ではなく、予約注文とインターネット、マルシェ（今は子育て中でお休み）などで販売している知る人ぞ知る名店。お菓子を買いに行くのはもちろん楽しみなのだが、弾丸トークで腹筋が痛くなるほどの笑いを提供してくれるサービスまで付いてくる。

初めての子育てで悩みも多く、孤独感も強かった時期に、いずみちゃんに出会えたことは何より救いだった。めちゃくちゃ明るいいずみちゃんだが、反面繊細さを兼ね備えていて、それは丁寧に作られたお菓子からも伝わってくる。

そのお菓子作りに対する「好き」の熱量がすごい。2歳の娘を保育園に預けずに仕事をするのはなかなか難しいだろうが、寝る間も惜しんで一人で何種類もの焼き菓子を作ることもある。

「あたし、本当に好きなんだよね。だから寝なくても全然平気」

好きなことを仕事にできるって、簡単なようで難しい。子供の頃に思い描いた夢を実現している人はどれほどいるだろうか。最近小学４年生の時に書いた将来の夢を見つけたそうで「レストランのシェフになりたいって書いてたの！好きなものって揺らがないんだよね」と教えてくれた。

小学３年生から独学で料理を始め、ＮＨＫの「きょうの料理」が大好きで、アシスタントさんのマネをしながら料理の仕方を学んでいった。高校卒業後も迷わず調理師学校に進学し、仙台のパン屋や新庄の最上学園で調理の仕事を経験。

でも、大好きな料理に関わる人生も決して順風満帆ではなかった。２０代後半頃は先が見えず、自分にも自信が持てず、体調も悪くなり、どん詰まりだったと言う。そんな時、たまたま職場に持っていった手作りのお菓子を、昔東京の有名なお菓子屋さんで働いていたというおじさんが食べて「うまい！」と言ってくれた。「一瞬光りが見えたんだよね」。これを機に、もともと明るい性格のいずみちゃんは勢いに乗ってお菓子を作るようになる。

田舎でお菓子屋として独立することに最初は心配の声も上がったが、お菓子を食べてくれた人からの「店したらいいんでねの？」という後押しと、いつでも理解し応援してくれる両親のサポートもあって、開業にこぎつけることが出来た。

自宅の６畳間を改装して作った小さな工房は、いずみちゃんの大切な居場所。

「お菓子に救われたんだと思う」と言うが、きっといずみちゃんが心のなかで求めていたことだったから出会えたのだろう。

開業して今年で１０年。専門的に製菓を学んだわけではなかったので人一倍努力してきたはずだ。

見た目にも楽しくなるアイデアに溢れたいずみちゃんのお菓子。材料もかなりこだわっていて、体に優しい素材も嬉しい。随所に「喜んでもらうことが好き」が溢れていて、買い手の私はいつも「美味しい」以上のものをもらっている。

「満腹で、心も満足すると人は優しくなれるんだよね。悪いことなんか考えなくなる」。この言葉に、ハッとさせられた。一枚のクッキーが平和への鍵を握っているかもしれない。

※現在子育てとの両立で大量のご注文にお応えできない可能性があるため、店舗情報は記載しておりません。

2020年10月7日発行
編集：最上町地域おこし協力隊 山﨑香菜子
情報提供や山﨑とお話したい方はご連絡ください
電話0233-43-2261（最上町役場まちづくり推進室）
メールhayakawamiyage@gmail.com